

教職大学院 Newsletter

No. 2006

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科 since2008.4 2026.5.1(公開版)

「1° の転換」が描く未来に向かって

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学 連合教職開発研究科
准教授 梶川 正樹

先月、学位記伝達式が大講義室で厳かに行われました。後方からその様子を見て、自分が院生だった頃の学位記伝達式とオーバーラップしていました。私が本学教職大学院を修了したのは、早いもので11年前になります。当時はまだ学校改革マネジメントコースもなく、1学年の定員は30名で、学位記伝達式もコラボレーションホールⅠで十分全員が集まれる規模でした。今とは違いオンラインでつながることもなく、コラボレーションホールⅢもありません。その時代のことを思い出しながら、頭の中では一つの問いが生まれていました。

「なぜ、本学教職大学院がこんなにも長期に続くコミュニティであり続けられているのだろうか」ということです。その答えは、1つではなく教職大学院の様々な学びが複雑に編み込まれ、重層的であるため、容易に紐解くことはできないことは想像できます。しかし、昨年1年間スタッフとして教職大学院に関わり、敢えて、その紐を少し解くとすれば、本学の教職大学院は、教師の養成観がしっかり確立され、そのための組織・カリキュラムが丁寧に設計されているからだという私なりの答えにたどり着きました。

昨年度、私は独立行政法人教職員支援機構(NITS)の研修マネジメント力協働開発プログラムやコア研修、福井県教育総合研究所の中堅教員研修や初任

者研修、マネジメント研修等、多くの研修に関わらせていただきました。本学教職大学院が、それらの研修デザインに大きく寄与していることに改めて気づかされました。私がそれらの研修に参加し、ともに学んできたことで見えてきたことや感じたことについて自分の経験と照らし合わせながら、紹介していきたいと思います。

主体的に学び続ける教師の姿は、児童生徒にとっても重要なロールモデルとなります。「教師の学びと子どもの学びは相似形」とよく言われますが、学ぶということ自体に教師も児童・生徒に違いはありません。そして、「令和の日本型学校教育」を実現するためには、子供たちの学びである「授業観・学習観」の転換とともに、教師自身の学びである「研修観」の転換を図る必要性があります。

これまでの研修は、教師目線を主とした伝達型講習やハウツー型研修が多く見られました。しかし、現行の学習指導要領では「何ができるようになるか」

内容

巻頭言	(1)
スタッフ紹介	(4)
院生自己紹介	(10)
令和7年度長期実践研究報告 一覧	(27)
その他	(30)

を重視し「何を学ぶのか」「どのように学ぶのか」を考えることが必要とされています。これらに主語をつけるのであれば、「(児童・生徒)が何をできるようになるのか」「(児童・生徒)が何を学ぶのか」「(児童・生徒)がどのように学ぶのか」と主語はすべて児童・生徒となります。

「教師の学びと子どもの学びは相似形」ならば、研修も受講者の具体的な学びの姿を考えて「受講者を主語」にした研修観への転換は自然な流れとなります。研修を通じて、受講者に新たな、豊かな気づきを生み出す時間や空間をどのようにデザインするとよいか、3つの視点で見えていきます。

その研修デザインの変化の1つ目は、その心臓部とも言える「対話」です。『省察的実践とは何か』（ドナルド・A・ショーン、柳沢昌一・三輪健二（監訳））では、技術的合理性（一般的な原則を適用することで問題を解決しようとし、高地にある低地に適応する考え方）について書かれています。そこから省察的実践（自らの行為を振り返りながら実践し、その学びを次の行為に生かし続けることで専門性を高める実践のあり方）に研修観も転換するのであれば、対話の時間は不可欠な要素となります。対話の中で他者の話を傾聴することは、聞き手にとっての学びになります。しかし、それ以上に発話者自身が対話を通じて、自身の考えや思いが整理されたり、展望を語ったりすることに大きな価値があります。

私自身も対話の中で、発話して考えがまとまったり、何を目標そうか展望が見えてきたりした経験があります。対話が気づきのカギだということは間違いありません。そして、もう一つ重要なことはそれを記録にするということです。自分自身に生まれた気づきを「話す」だけでは、その話し言葉が瞬間的に消え去ってしまいます。自分の中で生まれた気づきについて時間をかけて熟考したことも、頭の中に置いておくだけではいつかは薄れていくものです。今では、音声録音できる便利な機器もあります。使い方によっては、とても有効なものではありません。しかし、内省という視点では、書いたり、消したりを繰り返しながら記録に残すことしか自分自身と

向き合うことはできないのではないのでしょうか。こうして、巻頭言を書いている自分にも言えることでもあります。

2つ目の研修デザインの変化として重要な要素は「学び合うコミュニティ」ではないのでしょうか。研修の多くは、「ホームグループ」という4～5人のグループに分かれて、対話の場が準備されていました。いわゆる「協働的な学び」の場です。対話のグループから、問い返しや価値づけなどがあることで、豊かな気づきや理解につながるのです。

私たち、教職大学院のスタッフの学びにFD（Faculty Development）という時間があります。各種答申や理論書等について読み合い意見交換する場です。上述の『省察的実践とは何か』についても、昨年、読み合いグループで意見交換する機会を得ました。予定されていたFDの日の事前に、自主的に数名のスタッフと、それぞれがその本を読んだの気づきなどを聞き合いました。そうすることで、自分の考えが整理され、相手の話を聞くことで理解がかなり深まった感覚が生まれました。翌週、そこで得た学びをFDの時間で、さらに新たなスタッフと対話することで、豊かで深い気づきにつながる経験ができました。

実際にNITSや福井県教育総合研究所の各研修の多くには「ホームグループ」と「クロスセッショングループ」が用意されていました。「ホームグループ」から離れ、「クロスセッショングループ」という違うメンバーに向かって話をしたり、聞いたりする。これまでと違うメンバーに語るため、さらに相手に分かるように、もう一度話を組み立て直すことが必要になり、学びが繰り返されることとなります。私も、FDできっとその経験ができたのでしょう。オンラインでの対話も時によって行いますが、その際ホストの役割を経験するとグループ協議中に次の新しいグループ編成を準備できる機能があることが分かります。これは、「クロスセッション」を行うことを前提とした機能と考えられ、その有効性を示すものではないかと想像されます。

3つ目の研修デザインの変化は、それぞれの時間の内容につながりがあるインターバル研修(時間をおいて複数回行う研修)になっていることです。1回の研修だけでは、その場だけの気づきだけで終わってしまいますが、複数回の研修は、それをどう実践として展開していったのか、あるいはどんな障壁があって展開しにくい状況にあったのかを知ることができます。

昨年度、ある学校に1年間を通じて複数回研究会に参加させていただくことができました。毎回、研究主題をもとに、真剣に語り合っていました。1回の参加では分からなかったのですが、1年間を通して見ると、季節がどんどん移り変わるように、先生方の授業観がどんどん変容していく様に感動しました。

〇〇観の転換にある「転換」という言葉の意味は、「物事の傾向や方針を別の方向に変えること」です。その言葉から、これまでのことから180°変化するような印象を受けます。しかし、実際「〇〇観の転換」を無理に図ろうとすると、コンフリクトが生じることもあり、一気に変わることは難しいです。

以前、公開研究会を定期的に行っている研究推進校で、初めて研究主任を任された経験があります。任された以上は、何か結果を残さなければと肩に力が入っていた当時の自分は、これまでの研究主題を

大きく変えることを提案しました。その時、管理職から「他の先生方がついていけなくなるし、無理はしないでください」という言葉をいただきました。その時、私が新採用当時の学年主任から言われた一言「1°方向を変えるつもりで。たった1°方向を変えただけでも、そのまま前に進んでいけば最初とは違う場所に到達することができます。」という言葉思い出しました。

「転換」の意味にある「別の方向に変えること」は1°変える気持ちで構わないと思います。たった1°変えることでも、その取り組みを継続的に粘り強く進めた先にはきっと別の行きたい方向へと寄り着くことでしょう。

4月、開講式が行われました。新たに64名の院生の皆さんを迎え入れての出発となりました。大学スタッフも同様に新しいメンバーをお迎えしました。さあ、いよいよ、4月月間カンファレンスの始まりです。授業観・学習観・研修観・養成観の転換とさまざまな立場で、関わりは変わりますが、VUCAの時代「令和の日本型学校教育」の実現を目指し、今もっている〇〇観の転換へとともに歩んでいきましょう。そして、協働探究者として、ともに学びを楽しんでいきましょう。



スタッフ紹介



福井大学連合教職大学院 准教授 井口 哲平(いぐち てっぺい)



はじめまして、井口哲平と申します。私は、長野県の中学校教員を17年、中高一貫校の教員を5年勤めた後、長野県総合教育センターで経年研修の企画・運営やキャリア教育の研修講座を3年間担当しました。4月から、福井大学連合教職大学院のスタッフとしてお世話になります。私の出身は、長野県岡谷市というところで、2月に福井大学教職大学院と岡谷市教育委員会が連携協定を結んだということもあり、縁を感じています。

私の教員生活は、多くの方との出会いが大切だったと思います。きっかけや転機になったと感じる出会いについて紹介し、自己紹介とさせていただきます。

私が「学校の先生」になりたいと思ったのは小学校2年生のときの担任がきっかけでした。1年生のときに担任が産休に入ったため、2年生の1学期だけ担任だった先生です。1年生のときに担任が変わったことで、クラスはあまり良い状況とは言えませんでした。そこに大学を卒業してすぐの先生が入って、クラスで歌を歌ったりみんなで裏山にあったアスレチックで遊んだりしたことをよく覚えています。それまでバラバラだったクラスが、その先生を中心に1つになったと感じました。担任が変わっただけで、それまであまり仲良くなかった級友とも仲良くなったり、毎日学校に行くのが楽しみになったりし

ました。「学校の先生」が格好いいと思い、私もそうなりたと思ったことがきっかけでした。このときを振り返ると、教師の『影響力』はとても大きいと思いました。自分が働いているときには、プレッシャーでもありましたが、やりがいに繋がっていました。

私が本当の意味で「学校の先生」になったのは、2校目のクラスを担当したときだったように思います。1校目は若い先生が多く、その先生方と楽しく過ごすことはできましたが、受け持った学級は失敗の連続だったように思います。副担任で入ってくださった生徒指導の先生から、教室環境や生徒に対する指導の基本について教えていただきながら何とか終えたという感じでした。2校目では、その先生の教養を入学時から徹底しました。すると、1校目でうまくいかなかったことと同じようにやっても、何故かうまくいきます。その学校は3年間クラス替えがなく、担任も同じだったのですが、3年生のときは私が何もしなくても生徒同士で問題解決をし、私はその姿を見守っていました。剣道に「守破離」という言葉があります。このクラスはまさにこの言葉通りの成長をしたと感じた3年間でした。1校目に会った先輩の先生の『指導力』は、真似してみると生徒が自分自身で進む力をつけることだと実感し、それまで生徒に言うことを聞かせることが『指導力』だと思っていた自分を反省しました。

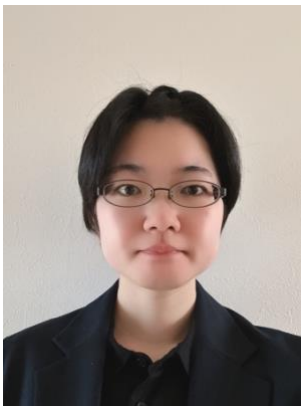
私の担当教科は数学です。数学の授業は毎回楽しく取り組んでいました。どうすれば生徒にわかりやすく授業ができるか、どうすればもっとテストの点が上がるのかを考え、他の先生の授業の様子を聞いたり、いろんな著書を読んだりしながら工夫して取り組んできました。しかし、前述の中高一貫校の生徒

は、中学校選抜で合格した生徒たちです。自分の力で、解決したいという思いが強い生徒たちです。これまでに考えてきた、わかりやすく、テストの点を上げるような授業では、授業はそれなりに楽しくできるのですが、本当の意味で力を伸ばしている実感があまりできなかったように思いました。生徒が自分からもっと知りたい、もっと学びたいという思いを引き出すにはどうすればよいか、授業をすればするほど小さくまとまっていく印象でした。誰のための授業なのか、自分が生徒のためと思ってやってきたことは、本当に生徒のためであったのか、そう考えて取り組んだのは『教材研究』でした。この材は本当に生徒の力を引き出すことができるものなのか、新たな疑問をもつことができるのか、高校の先生方にも相談しながら取り組んできました。すると、生徒は、私の出した問いで終わらない追究をするようになりまし

た。それまでは問題を解決するだけだったことから、生徒自身で課題を見つけ、取り組む姿を見せてくれました。徹底的に教材研究をすることで、生徒の新たな問いを支えることもでき、私の想定していなかった問いに対しては一緒に考えることもできました。中高一貫校の生徒たちに出会ったことで、それまでの私の取組を振り返り、本質は何かを考えることに繋がりました。

確かな『教材研究』をベースに、『指導力』を磨き、『影響力』が大きいことを自覚することを大切にしてきました。これは、恩師、先輩、生徒をはじめ、多くの方との出会いから気付いたことです。福井では、更に多くの方との出会いがあると思います。これから出会う方々と、互いに成長できる関係を作っていければと思います。よろしくお願いいたします。

福井大学連合教職大学院 講師 清重 めい (きよしげ めい)



今年度より連合教職大学院に講師として着任する清重めいと申します。専門は教育史であり、特に戦前の女子教育史の研究をしています。また、前年度までは東京大学大学院 教育学研究科附属 発達保育実践政策学セン

ターにて、乳幼児期の探究活動に関わる仕事をしておりました。

私が研究する戦前の女子教育史は、ともすると既に出てきた歴史として語られがちです。家事・裁縫が女子の必修として存在し、女子の多様な進路選択を家庭という特定の場に縛り付けたものとして捉えられてきました。私は特に裁縫教育史を検討し、実はそうではないということを指摘してきました。「女子の教育」として捉えると、戦後の男女平等という旗

印のもとで削減されていくものですが、女性が担っていた領域は人間の衣食住という生きることに直結する営みであり、機械的に切り捨てていいものではありません。戦前はむしろ重視されていたからこそ多様で豊かな教育的価値が見出され、魅力的な実践が生まれていたことを研究として明らかにしてきました。

上記の専門と前職において、分野の違いに驚かれるかと思います。私自身、学部時代から歴史研究に従事してきてはいるのですが、大学院時代には周囲の人たちからの声かけもあり、共同研究という形で様々な分野の研究に参加させていただいてきました。学校改革、幼児教育、インクルーシブ教育……。自分の専門ではなくとも、多様な専門・興味関心を持つ人が寄り集まって進める共同研究は、様々な刺激を与えてくれました。意外にも、自身の研究に還元できる知見やアイデアが生まれたことは、少なくありません。連合教職大学院という場は、様々な人たちが集

うという点でとても魅力的に感じております。学校現場、行政ですでに経験を積んできた人たち、ストリートマスターでまさにこれから教育に参画していく人たち、そして研究職として研鑽を積んできた人たちが集まり実践を検討するという事は、互いに思いもよらない視点がきつと生まれてくるはずで。まさに共同研究であり、研究・学びの真髓が、福井大学では既に場として整えられているように感じます。2月にはオンラインではありましたが、ラウンドテーブルにも参加させていただきました。学校の先生方や生徒、研究者が一堂に会しており、興味深く参加させていただきました。先生方の実践や学生の皆様の声に学ばせていただきながら、今後は自分も参画させていただきたいと思ひます。

また、福井大学では「書くこと」を重視しており、教職大学院の歴代の院生の皆さんも「長期実践研究報告」を作成しているとうかがいました。歴史は毎分毎秒ごとに生まれて過去のものへとなくなっていくが、福井大学では教育実践がまさに史資料として着実に蓄積されているということになります。私が専

門とする教育史・教育思想は、学校での教育実践に直接役立つものではないかもしれませんが。しかし、今この瞬間はこうした蓄積の延長線上に存在し、私たちが何の延長線上に立って生きているのかを学ぶ必要があります。現在の教室を、学校制度を形作るものは何であったのか、教師と生徒は何を背負って学校という場を生きているのか、私たち自身がこうした地層を知ることで学校・実践を見る解像度を上げ、新たな視点から実践を構築する一助になるものと考えています。学部や大学院の皆さんが生み出している「長期実践研究報告」などの資料から、新たに積み重ねられてきた実践を学び、これまで研究結果として蓄積されてきた教育実践史とリアルタイムで進行していく実践とを織り合わせていながら、自身の専門と絡めつつ私も学んでいきたいと思ひます。

私は徳島県出身で、大学進学から東京に住んでおりましたが、日本海側に住むのはこれが初めてとなります。福井という土地に対しても、また研究者としても新参者で若輩者ではありますが、精進していきたくと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。

福井大学教育学部附属義務教育学校 校長/福井大学教育学部附属幼稚園 園長

水野 涼子 (みずの りょうこ)



4月1日付で、義務教育学校 校長および幼稚園 園長を拝命いたしました水野涼子です。これまで福井市文殊小学校長を2年間、その後、福井市社北小学校長を3年間

務めてまいりました。

校長在任中には、教職大学院で院生として学ぶ機会をいただき、多くの気づきと学びを得ることがで

きました。校長としての職務を果たすことができたのも、同僚に恵まれたことはもとより、教職大学院の先生方や院生の仲間に支えていただいたおかげです。心より感謝申し上げます。

私はかつて、附属小学校（現・附属義務教育学校前期課程）において7年間、教諭として勤務しておりました。当時は、校舎改築や教職大学院との連携強化、さらには義務教育学校への移行など、大きな転換期にあり、学校全体が新たな方向へ進もうとしている時期でした。

また、この間、日本の教育も大きく変化しました。学習指導要領の改訂により、「何ができるようになる

か」という資質・能力の育成が重視されるようになりました。道徳の教科化に伴い、「考え、議論する道徳」の授業づくりにも取り組んできました。さらに、教員の働き方改革や学校運営の見直し、コロナ禍における教育の在り方の変容、GIGA スクール構想の前倒しによる ICT 環境の整備など、この9年間で教育を取り巻く状況は大きく変わったと実感しています。

そのような中、研究集会等で本校を訪れる機会もあり、校舎や施設の変化、教職大学院との連携の深化など、附属義務教育学校としての新たな歩みを感じておりました。職員室の一体化や新たな学びの空間の整備など、環境面での進化に加え、教育システムそのものも大きく発展していることを実感しています。

一方で、変わらないものもあります。シンデレラ階段から見下ろすホール、3階の教室から望む遠くの山々一かつて子供たちと過ごした日々の記憶が鮮やかによみがえります。卒業制作の数々からも、当時の子供たちの思いや願いが今なお伝わってきます。形は変わっても、子供たちの探究心を大切に、教師自身も学び続ける文化は、確かに受け継がれていると感じています。

さて、この9年間で、私自身もまた変化してきました。管理職としての経験を重ねる中で、とりわけ教職員が育つ環境づくりについて深く考えるようになりました。その大きな契機となったのは、コロナ禍における学校教育の混乱でした。子供たちや教師の学びを止めまいと模索する中で、「学校とは何か」「教育とは何か」という根本に立ち返り、考え続けるようになりました。

その中で大切にしてきたのが、「そもそも何のためにこれを行うのか」と問い直す姿勢です。活動の目的を見失わないためのこの問いは、働き方改革の流れとも相まって、教育活動の本質を見極める上で欠かせないものでした。こうした経験を通して、私自身の教育観も少しずつ変容してきたと感じています。

しかしながら、変わらず大切にしているものもあります。『はじめに子どもありき』（平野朝久 著）に示された教育の理念、すなわち子供観や授業観は、長年にわたり私の根底にあるものです。「授業とは、目の前の子供と共に創るものである」「子供をどう見るかによって、教育の在り方も実践も変わる」という考えは、学習者中心の教育の本質を示しており、今もなお私のよりどころとなっています。

変わるものと、変わらないもの。その双方の中で、戸惑いを覚えることもありますが、日々新たな気づきと学びに支えられています。

また、このたび幼稚園 園長も兼ねることとなり、就学前教育の重要性を改めて強く感じております。幼児期に育まれる好奇心や探究心、人との関わりの中で育つ力は、その後の学びの基盤となるものです。義務教育学校と幼稚園がつながる本校の強みを生かし、子供たちの連続した育ちを大切にしていくことで、自分自身も多くを学ばせてもらえるのではないかと、今から楽しみにしています。

子供たちにとっても、教職員にとっても、学びの多い日々となるよう努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

福井大学教育学部附属特別支援学校 校長 田上 博一 (たがみ ひろかず)



令和8年4月1日付で、福井大学教育学部附属特別支援学校校長として勤務することになりました。どうぞよろしくお願ひいたします。

私は福井大学で学んだ後、養護学校の教員として15年間勤務し、その後、福井県特殊教育センター(現・福井県特別支援教育センター)、県教育庁を経て、特別支援学校の教頭・校長を務めてきました。子どもと直接向き合って授業を行うよりも、学校や先生方と関わる仕事をしてきた年月が長かったと感じています。

これまでの教員生活を振り返り、印象に残っていることを三つ挙げます。一つ目は、新規採用時のことです。美浜町にある美方養護学校(平成10年から美浜町の嶺南東特別支援学校と小浜市の嶺南西特別支援学校)に勤務しました。新規採用は私を含めて7名。全員が嶺北地区出身で、特別支援を専門とする教員は2名という状況でした。私は、歩行が不安定で言葉を話さない一年生のAさんを担当しました。いつも手をつないで一緒に過ごしていたため、子どもたちから「Aちゃんの先生」と呼ばれることも多くありました。Aさんはスクールバスでの通学に時間がかかることやてんかん発作があることから、毎日保護者が付き添い、下校時間まで校内で待機されていました。授業中に視線を感じると、廊下の窓から心配そうに様子を見守る保護者の姿があり、毎日が授業参観のようでした。今なら戸惑いを感じるかもしれませんが、当時はそれが当たり前であり、他の子どもたちと同じように接していました。今思えば、貴重な経験でした。

二つ目は、平成15年に県特別支援教育センターに勤務した時のことです。まだ「発達障害」について広く知られていない時期でした(法律名に「発達障害」が入ったのは2005年の「発達障害者支援法」が最初

です)。集団に入れない子や書くことが苦手な子について、園や学校で先生方を対象に現職教育を担当しました。その際、ある校長先生から「専門家として具体的なアドバイスをしてください」と言われました。自分の経験の範囲にとどまらず、ニーズを把握して求められる役割を果たすことの大切さを意識するようになりました。また、平成21年には福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻で学ぶ機会を得ました。それまで特別支援教育の視点から教育を見るのが中心でしたが、通常教育の実践に触れたことは私にとって大きな学びとなりました。また、自身の教員としての歩みを振り返る時間を持てたことも、私にとって大事な経験でした。

三つ目は、教員として最後の一年です。役職定年後の一年間、教諭として特別支援学校に勤務しました。20年ぶりの授業、子どもたちとのやり取りはとても楽しいものでした。清掃指導として一緒にトイレ掃除をしたり、サーキットトレーニングで汗をかくほど走ったり、買い物や施設を利用する校外学習に出かけたりと、生徒から久しぶりに「先生」と呼ばれる日々でした。毎日の授業では、事前に内容や方法を考える時間も楽しく、予想どおりに進まなくても「次があるさ」という気持ちで取り組みました。20代・30代の頃にも、この気持ちで授業に向き合えばよかったと感じています。

最後に、教員として主に知的障害のある児童生徒を担当してきました。一人一人の個性や人間性、そして集団のつながりを大切にしたい教育実践は、様々な困難を抱え、個別の配慮や支援が必要な子どもたちの教育にも役立てることができると考えます。社会が変わっていく中で、教育においてどのような変化が起きるのか。皆さんのお話を聞きながら、私自身も自分の言葉で伝え、皆さんの成長に関わることができればと思っています。また、私もこれまで培ってきた教育に関する考えをさらに深めていきたいと考えています。どうぞよろしくお願ひいたします。

福井大学連合教職大学院（岐阜聖徳学園大学）教授

寺田 圭子 (てらだ けいこ)



今年より、福井大学連合教職大学院に参加させていただくことになりました、岐阜聖徳学園大学の寺田圭子と申します。私は、岐阜県内の小学校・中学校で 20 年間勤務し、

後半の 18 年間は、県や市の教育委員会で教育行政を推進し、管理職としても学校経営や人材育成に携わってきました。

この間の私自身の実践の中で、現在の“わたし”に大きな影響を与えた基点を次の 3 点から振り返ってみたいと思います。

1 点目は、教員として採用され 13 年目からの数学科授業改善へのチャレンジです。目指したのは、「数理を創造する生徒」を育てること。当時勤務していた岐阜大学教育学部附属中学校のコンピュータ室を数学専科の特別教室とし、部屋のレイアウトを大幅に変更することから始めました。生徒自身が課題を設定し追究するためのアクティブ・ラーニングを可能とするために、コンピュータを 3 面の壁側に移動、部屋の中心にはグループワークができるように机と椅子を配置し、フリーアドレス型の学習環境を整えました。今で言う「協働的な学び」を実践しようとしたのです。

各時間の授業スタイルとしては、生徒一人一人が自分の考えを創り、それぞれのタイミングで仲間との交流に移行できるよう追究の時間を十分に確保し、考えを広め深める柔軟な授業設計としました。また、単元の出口に発展的な学習の時間を位置付け、自己課題を設定しその解決の足跡をレポートにまとめ、小グループで交流するというユニットを位置付けることで、主体的に学ぶ姿を育成することができまし

た。振り返ってみると、この新しいチャレンジは、それまでの 12 年間の実践から生まれた発想でした。初任の中学校で研究を進めた、進学指導から脱却したキャリア教育、2 校目の小学校勤務で出会った生活科での個別探究学習、そして、3 校目の中学校で導入したチーム・ティーチングによる授業実践・・・様々な経験と実践を振り返り繋ぐことで、新しい時代にマッチした授業改善が可能となりました。

2 点目は、教職 21 年目からの県教育委員会での勤務です。指導主事としての 3 年間を経て、その後は管理主事として人事行政に関わることになりました。当時、教職員向けに作成した「キャリアアップの手引き」には、自分の仕事に対する考え方を次のように述べています。

「“教育は人なり”と言われますが、管理主事はその礎を創る仕事です。優秀な教員を採用したり、先生方のキャリアアップにつながる人事異動の仕組みを整えたり、法令に則り地道にこつこつと進める仕事です。そして、先生方の「今」と「未来」を作る仕事です。子供たちの前に立つ先生の姿は、一人の人間としての生き方そのもの。先生一人一人が自分らしさを発揮し、教員という生き方を選択したことへの誇りと自信を自らの姿で子供たちに伝えることのできる学校現場でありたい…管理主事の仕事に出会ってなければこのような視点で学校教育をみつめることはなかったことでしょう。」

子供たちに直接関わる機会が少なくなったことに淋しさを感じつつも、教育行政の仕組みを学びながら、自分の仕事子供たちと先生方の幸せにつながるよう取り組んだ貴重な経験となりました。

3 点目は、教職を退職し、現在の勤務地である岐阜聖徳学園大学教職教育センターの次長として勤務したことです。カリキュラム、教育実習、就職・採用試

験対策等様々な角度から、学生の「教員になりたい」という夢を叶えるお手伝いをしたいと願い業務に携わってきました。大学4年間の学びを終え教員免許を取得し新たなステージに向かう学生たちの姿を間近で応援することができ、人材育成を通して恩返しできたような気がします。

このように、これまでの足跡を見つめてみると、節目節目に出会った方々の笑顔が浮かびます。充実した日々をプレゼントしてくれた児童生徒の皆さん、共に実践を積み上げ苦楽を共にした教職員の皆さん、

保護者や地域の方々、学校勤務のみでは出会うことのなかった行政の皆さんなど、多くの方々に支えていただき現在の“わたし”がここにいるということを実感しています。

この度、このような貴重な機会をいただいたことで、福井大学連合教職大学院の皆様がこれまで築いてこられた豊かな成果や優れた実践に学びつつ、自身の経験を生かしながら新たな学びを深め、さらなる「恩送り」に努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。



院生自己紹介



授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

石田 美月 (いしだ みづき)

初めまして、今年度より福井大学教職大学院授業研究・教職開発専門性コースに入学しました、石田美月です。

昨年までは福井大学 教育学部 初等教育コースに所属し、英語科を専攻していました。取得している免許状は、小学校一種、中学校一種（外国語）、高等学校一種（外国語）の免許状です。

私は児童一人ひとりの個性を理解し、尊重して、向き合うことができる教員を目指しています。高校での国際交流や活発に意見交換を行う授業を通して、性格や考え方、価値観などの個性は多様であり、尊重されるべきものであると感じました。このことから、私は将来教員として、児童の個性を理解し、尊重するとともに、個性の多様性及び重要性に気付き、互いに尊重し合うことができる児童を育てたいと考えるようになりました。このような児童を育成するために、

児童の個性を引き出し、生かす教育ができるような授業や学級づくりを目指しています。

また私は、児童の考えを引き出し、互いに学びを深め合える授業づくりの研究を行いたいと考え、大学院へ進学しました。大学3年次の福井大学附属義務教育学校前期課程での教育実習の際に、授業づくりの奥深さや、「問い返し」などの授業をより良くするための教員の能力の大切さに気が付きました。そこから児童同士で考えを深め合い、深い学びができる授業をするためにはどのような授業構成や活動内容、教員のサポートが効果的であるのかについてもっと学んでみたいと思い始めました。また教育実習の際に、実習生のサポートに入ってくくださった福井大学院の院生の方から児童の発言に対する教員の返答の一つとして、「問い返し」を教えていただき、教員の言動によって児童の学びの深まりが大きく変化することに気が付きました。そこから児童の考えを深める

ための教員の支援方法を学び、実践することでその技術を身に付けたいと考えるようになりました。

これらのことから、私は大学院生活の中で主軸となる長期インターンシップ・学校拠点プロジェクト研究を通して、教師の仕事の総体や年間リズムを学びながら、児童の学びを深めることができるような授業づくりの研究及び実践を行っていきたくです。さまざまな先生方の授業を参観させていただくことで、先生方の授業スタイルを学び、自分の授業に取り入れていくなどして、自分の授業スタイルを確立していきたいです。また週間・月間カンファレンスを通して、他の院生たちとそれぞれの学びや気づきを共

有したり、教育や学校について多様な視点から議論を行ったりしながら、自分が目指す教育について改めて考えていきたいです。

4年間の大学生活は本当にあつという間でしたが、これらからの大学院での生活はもっと早く終わってしまいます。より多くの学びや気づきを得て、自分が目指す教員像に近づくためにも、今まで以上に1日1日を大切にしながら研究を進めていきたいと思えます。

これから関わる院生の方々、インターン先の学校や大学の先生方、お力添えをいただけますと幸いです。2年間どうぞよろしく願いいたします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市中藤小学校

石谷 慧 (いしたに けい)

今年度より福井大学連合教職大学院授業研究・教職専門性開発コースに入学しました、石谷慧と申します。昨年度までは、福井大学教育学部学校教育課程初等教育コース1系に所属しており、音楽科を専攻していました。取得免許は、小学校一種、中学校一種（音楽）、高等学校一種（音楽）です。出身は大阪であり、卒業後は地元で教員として働こうと考えています。

私は元々教員志望ではなく、将来何をしたいかを明確に持っているわけではありませんでした。そんな私が教員を目指した理由は、これまでにお世話になった先生方に憧れと尊敬の念を抱いたからです。思い返してみると、私の学生時代に出会った先生一人ひとりが、私という1人の生徒に対してとても親身に寄り添っていただき、様々な面において成長のサポートをしていただいたと思っています。とりわけ高校時代の先生方には、受験勉強から生活指導、日頃の悩みの相談までしていただき、今でも毎年会うなど関わりが続いている先生もいらっしゃいます。そのような、子ども一人ひとりに寄り添い、その子の成長を間近で見届けられる教員という職業

に魅力を感じ、大学時代は紆余曲折ありながらも、教育実習や児童館の支援員などの経験の中でその気持ちは消えることなく、現在に至ります。

趣味はいくつかありますが、その中でも特に好きなものが2つあります。1つ目は旅行です。私は中高一貫校に通っており、そこで交通研究・写真部という部活に入っていました。特に高校時代は部長を務めていて、他の部員の意見も聞きながら2泊3日の夏合宿の行程を組む経験などを通して、大人数で行事を企画し、実行することの難しさと面白さを実感しました。こと旅行の計画立案に関しては、現在も時間があれば弾丸旅行を計画し実行するなど、少々自信があります。ですので、将来教員となった際、子どもたちと修学旅行に行く際の計画立案を一緒にすることが少し楽しみであったりします。

2つ目は音楽です。私は幼少期からピアノを習っていて、地元の小さなコンサートに出演したり、小中高それぞれの卒業式や合唱の伴奏をしたりなどの経験を積みました。クラシック曲ではショパンの曲を最も多く弾き、大学での卒業研究では『バラード第1番』の考察と演奏を行いました。また、幼少

期から音楽が身近な存在であったことから、絶対音感を持っており、いわゆる耳コピをしてピアノを弾くこともあります。

私が大学院進学を決めた理由は主に2つあります。1つ目は、年間を通した子どもの成長や授業カリキュラムの作成、学級経営などを間近で見たいと思ったからです。1年間の中で子どもたちがどのような学びを行い、どのような刺激を受け、そしてどのように成長していくのか、また教師は子どもたちに質の高い学びを提供するために、どのような授業カリキュラムを組み、学級経営を行うのか、その全体像を私はまだ見たことがありません。そのため、実際に現場に出る前に子どもたちの様子を見取る、先生方の指導を観察する、或いは実際に自分自身が子どもたちに働きかけることによって、教師としてのスキルアップを目指していきたいと考えています。

2つ目は、自らの音楽の専門性をより高めたいと思ったからです。私は高校時代まで、音楽はあくまでも趣味の範疇という認識でした。入学試験も他の音楽科学生とは違ってごく普通の筆記試験を受験し、当初は別の科目を専攻しようとしていました。紆余曲折を経て音楽科に入った先で、私は音楽を専門的に学ぶための知識・技術の明らかな不足を痛感

しました。しかしそれは同時に、自らの現在地を知ることにもつながり、大学では音楽技術の基礎を固め、音楽の歴史、理論、教育法などを習得し、それらで学んだ理論等を自らのピアノ演奏に生かしていくというサイクルの下、音楽の専門性を少しずつ高めていきました。

一方で学校現場に目を向けると、音楽という科目は、小学校、中学校では週に1,2回程度、高校では週に1回、場合によっては授業がない週もあるなど、他の科目に比べて子どもたちに教えられる時間の少ない科目です。このような限られた短い時間の中で、子どもたちに1つでも多くのことを教え、生涯にわたって音楽に親しむ心を育むためには、教師の音楽の専門性をより高めておくことは、1つの重要なポイントとして挙げられると思います。次の2年間では、これまでの4年間では学べなかった多くのことをさらに学び、自らの専科であるピアノの力量もより高めていき、音楽の専門性を向上させるための自己研鑽を続けていきたいと考えています。

大学院では、インターン、大学での講義、その他学内学外問わず様々な場面で自己研鑽を続け、将来の糧となる充実した時間を過ごせるように頑張りたいと考えていますので、何とぞご指導宜しくお願い致します。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

石丸 裕也 (いしまる ゆうや)

はじめまして。この春から福井大学連合教職大学院連合教職開発研究科教職開発専攻、授業研究・教職専門性開発コースの免許取得プログラムに入学いたしました、石丸裕也と申します。出身は愛知県です。昨年度までは福井大学国際地域学部にも所属し、在学中は主に第二言語習得について学んでまいりました。趣味は野球観戦、旅行、読書で、中日ドラゴンズのファンです。今年も14年ぶりのクライマックスシリーズ進出を期待しながら応援しています。大学時代は

国際ボランティアサークルに所属し、ゴミ拾いなどの身近な活動や住居支援活動に取り組んできました。これら4年間の経験を通して、視野を広げることや、多様な意見を大切にすることの重要性を学びました。

教職大学院の免許取得プログラムでは、中学校・高等学校の英語を専攻しております。私が在学中に教師という職業を志すようになった理由は、大きく2つあります。1つ目は、学部3年次の交換留学の経験です。学部と協定を結ぶハンガリーの大学に、約半年

間留学する機会をいただきました。現地の大学には日本学科があり、日本語や日本文化に関心を持つ学生たちとともに学びました。特に、授業を「観察する」という立場に関わったことで、教師の実践の奥深さを強く感じました。現地では日本語は必ずしも主要な言語ではなく、教材や学習資源も限られていましたが、そのような状況の中でも、教師の方々は明確な意図をもって授業を構成されていました。例えば、「実際に日本語を使う場面」を想定したロールプレイング活動を取り入れるなど、工夫を凝らしながら実践的な力の育成が図られていました。

また、学習者の興味・関心を引き出す話題設定や、達成感を得られる課題の提示など、学びを継続させるための工夫も多く見られました。こうした働きかけが、学習者の主体的な学びを支えていることを実感しました。同じ内容であっても多様なアプローチがあることを知り、学習者一人ひとりに応じて指導を工夫する教師という仕事に大きな魅力を感じました。

留学中には日本語を学ぶ友人の学習を手伝う機会もありました。試験対策や課題のサポートを通して、相手の理解度に合わせて説明することの難しさを感じる一方で、理解が深まったときの喜びや、学びを支えることのやりがいも実感しました。こうした経験から、学習者に寄り添いながら支援することの大切さを強く感じるようになりました。

2つ目は、言語学と英語学習の関係性を学び、それを教育の実践につなげたいと考えたことです。近年はAIの発展などにより、英語学習の在り方も大きく変化し、求められる力も多様になっています。そのような中で、単なるコミュニケーション能力の育成に

とどまらず、言語の背景にある文化や価値観への理解、すなわち異文化理解の視点を取り入れた指導が重要であると考えています。また、言語の違いによって表現や物事の捉え方が変わる点にも大きな意義を感じており、こうした気づきは、言語理解を深めるだけでなく、他者理解にもつながると考えています。さらに、英語学習に対して強いコミュニケーション志向を持たない学習者もいるため、言語の構造的な面白さや文化的背景など、さまざまな側面から学習の意義を感じられるような指導が必要だと考えています。こうした多様な関わり方は、生徒一人ひとりの関心や適性に応じた学びを支え、学習意欲の向上にもつながると考えています。

在学中には第二言語習得論や英語学の基礎を学び、卒業研究では「高校英語教育における異文化理解を促す指導法と教育的効果」をテーマにアンケート調査を行い、教育現場の実態と課題について考察しました。今後はこれらの学びを基盤に、教職大学院で専門性をさらに高め、理論と実践を往還しながら、コミュニケーション能力と異文化理解の双方を育成できる指導力を身に付けていきたいと考えています。

私は他学部からの進学であり、不安に感じることもあります。3年間の免許取得プログラムを通して、教育理論や教科指導法を一つひとつ丁寧に学び、実践的な指導力を着実に身に付けていきたいと思っております。また、「学校」というコミュニティのあり方についても理解を深めていきたいです。まだまだ未熟ではありますが、先生方や先輩方、そして同期の皆様のご指導をいただきながら、少しずつ成長していければと思っております。どうぞよろしくお願いたします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市至民中学校

太田 瑞希 (おた みずき)

はじめまして。今年度より授業研究・教職専門性開発コースに入学しました、太田瑞希です。昨年度ま

では福井大学教育学部中等教育コース理数・生活教育サブコースに所属していました。小学校二種、中学

校一種（数学）、高等学校一種（数学）の教師免許状を取得しています。

中学校は合唱部で声量お化けになり、高校は弦楽部で一目惚れした先輩たちに教わるためにバイオリンを始め、大学ではオーケストラに所属して、暇さえあれば相棒のバイオリンを弾き続けているような人です。最近では福井交響楽団に入団して、人生の先輩方に囲まれながら、バイオリンパートの「平均年齢を下げる」という重要な役割を任されています。その影響か、普段はクラシックばかり聴いています。でもPOPSも好きです。歌うの好きなので。

こんなに音楽にまみれた私なのでよく勘違いされますが、専攻は数学です。よく文系顔とも言われるので、数学科だと思われることはほとんどありません。みなさんはしっかり覚えてくださいね。

さて、ここからはまじめな話もさせてください。私が教師になろうと心に決めたのは、小学4年生のときです。そこから今まで、教師になること1本で突き進んできました。中学、高校と進んでいくなかで、理科教師や英語教師になりたいと言っていた時期もありますが、結局は大好きな数学に落ち着きました。特に確率分野が好きです。卒業研究では「反復試行における確率の見積もり」に関する学習者の理解について考えてきました。授業の中で確率の計算方法を学んでも、実際の場面での直観的な判断にいい影響を与えていない現状に疑問を持っています。割合的に考えてしまったり、誤った収束の考えを使ったりなどの要因を、実際の調査データをもとに明らかにしてきました。確率分野は目に見えない量を扱うため、学習者がどのようなイメージをもとに考えているのかが理解の大きな鍵になると感じています。だからこそ、「どのように教えれば正しく理解できるか」

だけでなく、「なぜそのように考えてしまうのか」という視点も大切にしながら、授業づくりについて考え、研究し続けていきたいと思っています。

また、大学院に進学した理由の1つに、自分自身への不安があります。教師免許を取得し、教壇に立つ資格は得たものの、「このままの自分が子どもたちの前に立ってよいのだろうか」という疑問が常に頭の中にあります。授業を組み立てる力や数学に対する理解はもちろんですが、それ以上に、子どもたち一人ひとりの考えを受け止め、適切に関わっていくための力が、まだ十分ではないと感じています。だからこそすぐに現場に出るのではなく、もう少しだけ立ち止まって、自分の力を見つめ直し、鍛え直す時間が必要だと考えました。インターンでの現場の先生方との関わりや、大学院でのたくさんの議論から得る学びを通して、自分の中にある曖昧さや不安と向き合いながら、それらを少しずつ乗り越えていきたいと思っています。「このままではだめだ」と思っている自分も含めて受け止め、その上で前に進めるようになることが、今の自分にとっての大きな課題です。

最終的には、自信があるから教壇に立つのではなく、不安や迷いをもちながらも、それでも子どもたちに向き合い続けられるような教師になりたいと考えています。そのための土台を、この大学院での時間の中でしっかりと築いていきたいです。

音楽の話も数学の話もしましたが、基本的にはよく喋ってよく笑う人間です。明るく振舞ってはいますが、実は緊張していたり、お豆腐メンタルだったり不安定な人間でもあります。これから教職大学院の同期や先輩方、先生方や将来の後輩とたくさん関わっていくので、どうぞよろしくお願ひします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/岐阜聖徳学園大学附属小学校

岡本 一希 (おかもと いつき)

はじめまして。今年度より授業研究・教職専門性開発コースに入学しました岡本一希です。昨年度までは、岐阜聖徳学園大学教育学部数学専修に所属しておりました。取得免許は、小学校一種、中学校一種（数学）、高等学校一種（数学）です。

私は父親の影響もあり小学校のころから教師を目指してきました。数学の教師を目指し始めたきっかけは中学校3年生のときの数学の先生でした。その先生はよく授業の最初にユーモアのある話をしてくださいました。分かりやすく楽しく学べる授業だったことを覚えています。さらに高校1年生のときの担任の先生も数学の先生でした。授業では、教師がただ説明するのではなく、生徒が中心に考えるなどの工夫をしていました。さらに文理選択ではどちらに行こうか迷っていた私に、「いつきは数学の道に進んだ方が良い」と後押しをしてくださいました。また、学校行事では、誰よりも情熱的に取り組んでいる先生を見て「自分もこんな先生になりたい」と思うようになりました。ユーモアある話をしながら楽しい授業をしてくれた数学の先生、学校行事には生徒と一丸となって取り組み、授業以外でも様々なかたちで生徒に向き合っていた担任の先生2人の姿が私の目指す理想の教師像になっています。

学部では大学数学や数学教育について学び、その中でも特に大学3年生のときに学んだ算数教育の分野に興味を持ちました。学んでいく中で「て」「め」「あたま」で考えることの大切さに気づかされました。例えば、「あたま」の中だけで問題を解こうとすると、計算ミスをしてしまったり、問題文を上手く読み取れなかったりすることがあると思います。もし児童から「なぜ表や図を使って考えないといけないの」と聞かれたときにあなたは答えられるでしょうか。これに限らず、私たちは当たり前だと思っていることに対する児童の疑問を「その方法を使うと分かりやすいから」で終わらせてしまっていると自分自身も感じます。でもそれはもったいないことだと思

います。疑問は学びのスタートだとよく言われています。私自身、小学校・中学校での実習では、実際にブロックを使って数のたし算・ひき算を行ったり、中学校では、表やグラフなどから問題を読み取る活動を導入したりしました。算数が苦手な児童もブロックを使って説明することができたり、中学校では、表やグラフの特徴に気づき問題を解いたりしている生徒の姿を見ることができました。やはり「あたま」だけで考えるのではなく、何かの作業をするなど「て」を使って考えてみたり、表やグラフ、図などを「め」で見て考えたりすることの大切さを実感しました。「て」「め」「あたま」で考えることが児童生徒の自ら学ぶ意欲を引き出すことや自分たちで考えて課題を解決しようとする力を伸ばしていると感じ、導入で子どもの興味関心を引き出せる教師になりたいと思うようになりました。

大学院への進学は教員採用試験に落ちてしまい、自分にはまだ教師としての力量が足りていないと感じ、自信をもって教壇に立ちたいと思ったことがきっかけでした。ただ、教職大学院で実践を積み重ねるか、高度な数学の専門性を学ぶことのできる大学院で算数教育についてもっと詳しく学ぶのか、迷っていました。学部の4年間で教職よりも数学の専門性に重点を置いてきたこともあり、卒業後に学校現場に出て、自分の思い描く授業や学級経営ができるか考えたときに、教職の専門性が足りていないと感じ、教職大学院への進学を決めました。

大学院では、小学校5年生でのインターンシップを通して、高学年の学級経営について学んだり、算数の問題を読み取る力を伸ばす授業に焦点を当てて研究をしたりしていきたいです。理論を基に経験と組み合わせより教師としての力量を高めていきたいです。また、多くの先生方の授業を参観させていただき、自分の授業実践などに活かしていきたいと思っています。

教育実習のときには経験できなかった新たな学びが得られると思うと、とても楽しみです。楽しみを感じると同時に様々なことが初めてで不安なこともあります。大学院の先生方、配属校の先生方と子ども

たち、他の院生から多くのことを学び、自分の武器となるものを探していきたいと思います。2年間よろしく願いいたします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

小川 舞良 (おがわ まいら)

はじめまして。このたび、福井大学連合教職大学院授業研究・教職専門性開発コースに入学しました小川舞良と申します。どうぞよろしく願いいたします。昨年度までは岐阜聖徳学園大学看護学部にも所属しており、卒業と同時に看護師免許を取得しました。医療の分野で学んできた知識や姿勢を大切にしながら、再び「教師」という幼い頃からの夢に挑戦できることを嬉しく思っています。

私は小学生の頃から理科の授業に強い興味がありました。特に実験や観察を通して、「どうしてこうなるんだろう？」と自分で問いを立て、調べていく過程が大好きでした。中学校では、理科の面白さを存分に感じさせてくれる先生に出会い、授業が毎回楽しみになりました。その経験から、私もいつか先生のように、子どもたちに理科の面白さを伝えたいと思うようになりました。

理科は私たちの生活に深く結びついており、身の回りの多くの出来事が科学で説明できます。たとえば、エアコンの風向き一つをとっても、暖房と冷房でどのように使えば効率的なのか、理科の知識が生活の質を左右します。私は、こうした「生活に生きる理科の面白さ」を子どもたちに伝えたいと強く思っています。中学校でその“入り口”をしっかりつくり、理科って楽しい、もっと学んでみたい、と感じてもらえる授業を目指しています。

しかし、大学入試の際に思うような結果が出ず、一度は教員の夢を諦めざるを得ませんでした。その後、医療の道に進むことを決めましたが、大学院で再び教員を目指せることを知り、「もう一度挑戦したい」

という思いが強くなりました。途中で編入する選択肢もありましたが、看護学で学んだことが無駄になると感じ、まずは看護を最後までやり切ることを選びました。振り返れば、この選択が今の私をより豊かにしてくれたと感じています。

看護学では、人の体の構造や働きについて深く学び、多くの実習を通して観察力やコミュニケーション能力を培いました。これらは教育の現場でも必ず活かせると考えています。子どもたちの小さな変化に気づく感性や、一人一人に寄り添って話を聞く姿勢は、看護で得た大切な学びです。また、看護学で学んだ人体の構造や働きに関する知識は、中学校理科の生命に関する分野で大いに活かせると考えています。

私は将来教員になった際、子どもの自主性を大切にする授業づくりをしていきたいと考えています。知識を一方向的に伝えるのではなく、「自分で考え、試行錯誤し、発見する楽しさ」を味わえる授業を目標にしています。また、学級づくりにおいても、教師一人が作るのではなく、子どもたち自身が主体的に関わり、互いの個性や得意を認め合いながら築いていく学級を目指したいと思っています。

大学院では、先輩方や先生方から多くを学び、自分の引き出しを増やしていきたいです。インター校では、先生方にご迷惑をおかけすることもあるかもしれませんが、誠実に取り組み、学ばせていただく姿勢を大切にしていきたいです。また、学習指導要領の意図を深く理解し、現職の先生方と意見を交わしながら授業づくりを学びたいです。学校現場での経験を

通じてこそ見えてくる課題や気づきも多いと思うので、それらに一つ一つ向き合いながら成長していきたいと考えています。

大学院での2年間を通して、私が憧れた先生方のように、子どもたちの心に寄り添える教師へと近づきたいです。そして、自分らしい教育スタイルを見つけるためにも、日々学び続けたいと思います。これからどうぞよろしくお願いいたします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

川岸 桐吾 (かわぎし とうご)

今年度より、福井大学連合教職開発研究科の授業研究・教職専門性開発コースに所属しております、川岸桐吾です。

岐阜聖徳学園大学外国語学部を卒業しました。これまで、英語教育を通して生徒の可能性を広げたいという思いを持ち、学びを続けてきました。高校時代に出会った英語の先生の存在が、現在の進路を志す大きなきっかけとなっています。その先生は、単に文法や単語といった知識を教えるだけでなく、生徒一人ひとりに寄り添いながら「英語を使う楽しさ」や「異なる文化を理解する面白さ」を伝えてくださいました。授業の中で、自分の考えを英語で表現する経験や、海外の文化について知る活動を通して、英語が「勉強するもの」から「人とつながるための手段」へと変わっていきました。その姿に強く憧れ、自分も将来、生徒に寄り添いながら学びを支えられる英語教師になりたいと考えるようになりました。

英語は単なる教科ではなく、世界とつながるための重要なツールであると感じています。現代社会においては、多様な文化や価値観を理解し、他者と協働する力が求められています。その中で、英語教育は異文化理解を促進する重要な役割を担っており、生徒が広い視野を持つきっかけになると考えています。私自身、留学経験があり、海外の方との交流を通して、自分の中の「当たり前」が揺さぶられる経験をしてきました。価値観や考え方の違いに触れる中で、新たな視点を得ることができ、物事を多角的に捉えること

の大切さを実感しました。このような経験を、生徒にも英語を通して提供できるよう構想しています。

現在は英語力の向上にも力を入れており、専門的な英語の知識の習得を目標に日々学習を続けています。語学力そのものの向上だけでなく、「どのように学べば効果的に身につくのか」という学習者としての視点も大切にしています。自らが試行錯誤しながら学ぶ経験は、将来、生徒の学習を支援するうえで大きな意味を持つからです。一方で、これまでの学びの中で、自分の指導力にはまだ多くの課題があります。例えば、生徒の理解度や興味関心に応じた授業づくりや、一人ひとりに合った支援の在り方については、より深く学ぶ必要があり、英語が苦手な生徒に対して、どのようにすれば学習への意欲を引き出すことができるのかについて、大きな課題意識を持っています。知識を伝えるだけでなく、生徒が主体的に学びに向かう授業を実現するためには、理論と実践の両面から学び続ける必要があると考えています。

こうした背景から、教職大学院への進学を決意しました。私は免許取得プログラムの長期履修課程として3年間在籍し、基礎から段階的に学びを深めていきたい所存です。本研究科では、理論と実践を往還しながら学ぶことができる点に大きな魅力を感じています。特に、インターンシップや現場での実践を通して、生徒との関わり方や授業改善の視点を身につけていきたいです。さらに、多様な経験を持つ先生方や院生の方々と意見交換を行うことで、自分の考えを相対化し、より深い学びにつなげていきたいと考

えています。また、教育現場では学習面だけでなく、生徒の生活面や心理面への理解も重要であると感じています。生徒一人ひとりが安心して自分を表現できる環境を整えることが、学びの土台になるため、生徒との信頼関係を築く力や、多様な背景を理解し受け止める姿勢を身につけていきたいです。

そして将来的には、生徒一人ひとりの背景や個性を尊重しながら、安心して学べる環境をつくることのできるよう尽力していきたいです。英語を通して

生徒が新しい世界に目を向け、自分の可能性を広げる支援ができるよう、この3年間の大学院生活を大切に、日々の学びと実践を積み重ねていきたいと思っています。

まだまだ未熟ではありますが、周囲の方々から多くのことを学びながら、自分自身も成長していけるよう努力してまいります。これから3年間、どうぞよろしくお願いいたします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/坂井市立丸岡南学校

小林 雅昂 (こばやし なりたか)

皆さん、こんにちは。今年度より連合教職大学院に進学しました、小林雅昂と申します。所属は授業研究・教職専門性開発コースの授業研究専門性開発アプローチになります。取得免許は中学校保健体育、高校保健体育、小学校です。あらかじめ皆さんに周知したいことが一点ございます。それは私の名である「雅昂」についてです。「雅昂」と書いて「ナリタカ」と呼ぶのですが、初対面の方には必ずと言っていいほど正確に呼ばれたことがないため、ここで一念を押しお伝えさせていただきます。また、よく「雅昂」を「雅昂」と書かれる方がおりまして、そうなりますと、名前の読みが、「ナリタカ」から「ミヤビスバル」になってしまうため、今後の円滑なコミュニケーションのためにも、ご承知のほどよろしくお願いいたします。

そんなことはさておき、私は以前まで福井大学教育学部学校教育課程中等教育コース保健体育科専攻に所属しておりました。実技科目では、体づくり運動、バスケットボール、バレーボール、バドミントン、サッカー、ソフトボール、水泳、陸上競技、ダンス、柔道、剣道など、そして座学では、スポーツバイオメカニクスや学校保健学、衛生学及び公衆衛生学、体育原論などで、専門性の高い学びを数多くいただくことができました。しかし、私が大学を通して最も深く没頭したものが、卒業研究です。研究内容としては、私

が年中の頃から18年間続けている空手道についてです。ここで、伝統派の空手道について少しご紹介します。空手道は主に形競技と組手競技に大きく分かれ、私の研究は組手競技についてのものです。組手競技には床の反発を使って小刻みに上下動のジャンプを行うフットワーク動作というものがあります。このフットワーク動作は一般的には突きや蹴りの動きに対してプラスに働くと認識されているのですが、実際に有効であるといった研究がされていません。そこで、空手道の突きにおけるフットワーク動作の有効性を明らかにすることを目的として大学では研究を進めてきました。しかし、現時点ではこのフットワークについては、突きの速度や距離、角度といった「運動の見た目」のみの検討までしか行っておらず、突きの際の踏み込み足の力発揮といった「運動エネルギー」はまだ検討できていないため、この観点から大学院では研究を進めていきたいと考えています。

また、私はこの研究を発展させた形として教育現場に還元させたいと考えています。私の研究で行っている「動作分析」というものは、体育授業に置き換えると、運動の客観化にあたると思います。近年、子どもたちの運動に対する苦手意識というものは増えつつあります。それは子どもたち自身の運動に対する「自己肯定感」の低さが原因の一つとして考えられます。このような子どもたちが「自身の運動の見える

化」を行うことで、自身の成長・変化というものがわかりやすい体育授業の魅力に気付くことができると私は考えます。このように、子どもたちの可能感を少しでも多く感じさせることで、彼らの「自己肯定感」を高めながら、体育授業だけでなく、他教科の授業や今後彼らを待ち受けている様々な困難にも負けずに、自身で課題を解決できるような自己調整力を持った子どもたちを育てていきたいと私は考えています。そのためにも、大学院での長期インターンシップと大学院での研究を通して理論と実践の往還をできる

環境をフル活用し、自分が考える教育の実現に向けて着実に力を付けていきたいです。

大学院での学びを一滴たりとも取りこぼさない気概で福井県の教育に貢献できる人材になれるよう取り組んでまいります。二年間をともにする同期や様々なことでお世話になる大学教職員の皆様や先輩方、長期インターンシップでお世話になる現職の先生方、2年間よろしく願いいたします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井県立科学技術高等学校

澤崎 隼平 (さわざき しゅんぺい)

この度、福井大学大学院連合教職開発研究科、授業研究・教職専門性開発コースに入学しました澤崎隼平です。

昨年3月までは福井大学教育学部の技術科に所属していました。現在は、小学校1種、中学校技術1種、高校工業1種の免許を取得しています。

私は、生まれも育ちも福井で毎日を自然と戯れながら過ごしてきました。幼児期の将来の夢は「ゴーカイジャー」、小学校では現実を見始めたのか「サラリーマン」と書いていました。夢が「楽しい生活ができれば」という抽象的な価値観を持っていたため、中学校時代も勉強に追われず楽しく生活をしていました。高校に進学する時、大学に行きたいと1mmも考えていなかった私は、工業高校に進学しました。

高校では、就職のための専門教科が多く、普通教科は少なかったため勉強が楽しかった思い出があります。またものづくりのすばらしさをこの工業高校で実感しました。1人で作る楽しさ、仲間と協力して一つのものを作る楽しさ、そして今まで習ってきた知識が製作物となって形に現れるうれしさ、このような体験は工業高校だからこそできたものだと思います。ものづくりの楽しさを知り、幸い成績も良かったのでこのまま大手の製造会社に勤めようと考えてい

た矢先、祖父からある言葉をもらいました。その言葉とは「大学は絶対に出た方がいいよ」というものです。この言葉が、私を大学に誘導し、結果的に教員を目指すこととなりました。今では祖父が転機をくれたと感謝しています。

このように人の転機というのはいつ来るかもわからないし、些細な出来事でも転機につながる可能性があります。

私はインターン先の工業高校で知識・技能の向上はもちろんの事、キャリア教育についても学んでいきたいと考えています。授業や学校生活の中で様々な技術やヒト、モノにふれて、子ども達が将来の道を選ぶ際多くの要素（給料、休暇、趣味、得手不得手など）を基に比較し、自分だけの人生を主体的に設計できるライフ設計ができるように教師が授業を工業高校ではデザインしていく必要があります。しかしながら、学部時代の教育実習では、中学校と小学校に行き実際に勤める工業高校には行きませんでした。そのため、今回のインターン先に工業高校を選択しました。実際の現場で、どの様な授業が行われ、どの様にキャリア教育が行われているのかを学び、子ども達の転機につながったり、職業を選ぶ際の要素が増えたりするような授業を模索していきたいと考えています。

他にも大学院では、自分自身も様々なところに足を運び、学会や他大学の研究会に参加したり、多様な考えを持つ人とコミュニケーションをしたりして、意見を交わし少しでも知識を増やしていきたいと考えています。学部時代からお世話になっている小林溪太先生の力も借りながら自分を成長していきたいと思っています。直感を頼りに自分が成長するために必要な力をもった人を見つけた際は、積極的に話をし自分に足りない所を人から盗み、自分の技術にしていきたいです。

最後にはなりますが、インターンでお世話になる福井県立科学技術高校の先生方にはご迷惑をおかけすることとなりますが、質の高い専門知識そして自身の授業やものづくりのスキルを向上させるために真摯に取り組んでいきたいと思っています。また、子どもからすると毎回の授業が一生で一度のものであり、良くも悪くも記憶に残り、人生の一部となります。教えるという責任のある立場にこれからなるので子どもに失礼がないよう、尽力していきたいです。

2年間という短い時間ですが、有意義な時間にしていきたいです。お力添えの程よろしくお願ひします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/岐阜聖徳学園大学附属小学校

田内 蒼空 (たうち そら)

はじめまして。福井大学連合教職大学院授業研究・教職専門性開発コースに入学しました田内蒼空と申します。昨年度までは岐阜聖徳学園大学教育学部理科専修に所属し、物理を専攻していました。取得免許は、小学校一種、中学校一種(理科)、高等学校一種(理科)です。

中学校、高校の部活で、バスケットボールをしてきました。中学のときの部活動選択では、バスケットは楽しいという経験はあったものの、一番は運動不足解消のためという不純な動機で入部しました。運動不足もあり、ついていくのに必死でしたが、かけがえのない時間になっていたと振り返ります。部活動の中で挫折も喜びも経験し、今の僕の人生や価値観に大きく影響してきていると感じます。大学に入ってから、部活に所属していなかったため、運動不足がログインして体重が3桁の大台に乗ってしまいました。流石に体調への不安を感じ、昨年の3月からダイエットを始めました。間食をなくし散歩を中心に運動を始めました。ダイエットを始めて1年以上が経過している現在は、体重を15kg以上落とすことに成功して、順調に目標体重に近づいています。ダイエットを始める前は自転車に乗ることが好きで、岐阜市内

の自宅から犬山城へママチャリで行ったり、毎回大学への通学(9km くらい)をママチャリで行ったりしていました。しかし、散歩を始めてからは散歩の方が楽しいと思うようになり、自転車での通学はやめなかったものの、3時間以上歩く日もあり自転車よりも多くの時間を歩くことに使うようになりました。ゆっくり歩きながら、自然に目をやると花が咲いたり紅葉が始まっていたりします。また、いつもとは違う道を通って新しい発見や景色があるのは楽しく面白いものです。

大学時代の出来事でもう一つ大きなことを挙げるとしたら教師を強く志したことです。教育学部に入学していましたが、これは高校3年生のときの大学受験でどの方向へ進んでいくべきか悩んでいて、親戚や両親に相談して教師をすすめられたため教育学部を受験しました。教師になるか別の職を選ぶか大学生になってからも考えていました。転職になったのは教育実習の時です。教育実習の中で、例えば、移動のときに列が乱れていて改善できると思ったことを、朝の会の時間にもっとこうの方がかっこいいよと伝えると、すぐに実践してくれたことや、授業が始まっても教科書やノートを全然開かなかった子と

関わっていく中で、私が授業をする実習の最後の方にはその子自身から、どう？と意見を見せてくれる積極的な姿になっていました。このような子どもたちの成長を間近で見ることができ、教師のやりがいや楽しさを肌で感じることができました。

教師を目指して、昨年度教員採用試験を受けましたが不合格でした。教育観や授業観が確立できていないなど不合格となった理由は多々あると思いますが、自分自身の中では伝える力が弱いことが一番の課題だったのではないかと考えています。もっと勉学に励み、子どもと教師や自分自身も関わりを通していく中で、教育観など、自分の中での軸をつくりあげたり、コミュニケーション力を身につけたりして

いきたいと考え、教職大学院に進学を決めました。コミュニケーション力は、信頼関係の構築や学級づくり、生徒指導など学校現場において全ての基盤になってくる重要な力だと考えています。大学院生活を通して、一番の課題と考えている、コミュニケーション力を鍛えていき、逆に自分の強みになるようにしていきたいです。

最後になりますが、インターン校や教職大学院の先生方、カンファレンスやラウンドテーブルなどご一緒させていただく皆さんにはご迷惑をおかけすることがあると思いますが、日々勉学に励み様々なことを吸収して充実した大学院生活にできるように精進していきます。2年間よろしくお願いたします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

田中 達也 (たなか たつや)

はじめまして。福井大学連合教職大学院に入学しました田中達也です！昨年度までは、福井大学教育学部中等教育コース(数学専攻)に所属していました。これから二年間どうぞよろしくお願いいたします！

私の趣味は旅行です！……というのもありきたりなんで、もう少し深掘りすると、「人と共に何かを計画すること」が何よりもワクワクするんです。どこを回り、何を食べるか、といった内容を仲間と共に考える時間こそが幸福です。実は、3月の卒業旅行シーズンは毎週のように旅行に行っていたため、貯金空っぽで大学院生活が始まってしまいました。こういった趣味もあり、学部時代には、旅行だけでなく友人たちとBBQや遊びの企画を担当することが多く、イベントを考えること自体が一つの楽しみになっていました。一番の思い出は、福井大学の学校祭にハンバーガー屋を出店したことです。何を店にするか、材料、宣伝……すべて自分たちで作り上げたからこそ、達成感も格別なものになりました。大学院でも皆さんと出店しませんか？

さて、私が教師という職業を志した原点は、中学校時代に出会った熱心な先生に心を打たれたことです。しかし、学部4年間で教職を学び、その動機は少しずつ変化していきました。今の私は、人生の大半を占める「仕事」を、心から楽しみたいと考えています。給料はもちろん大切ですが、それ以上に「自分で考える余地」が大きい職業に就きたい。決められた枠組みの中で、受動的に仕事をこなすのではなく、大きな責任は伴うけれど、自分のアイデアや工夫を形にできる環境。そういった場所であれば、私はどこまでもエネルギーを注ぎ、やりがいを感じることができます。そのために私は、教師を目指し、勉学に励んでいます。

私は今回、ストレートで現場に出ず、この大学院への進学を選びました。大きな理由は、自分の中に「軸」を見つけるためです。もしこのまま現場に出たとしたらどうなるか。授業づくり、クラスづくり、保護者対応……。現場の業務は膨大で、そのほとんどが学部4年間の座学では学んでこなかったものです。そして、思い出してみてください。学部時代、模擬授業を作る際に、複数の先生から別々のアドバイスをされ

て板挟みになった経験はありませんか？教育には正解がなく、先生の数だけスタイルがあります。それはある意味、宗教のようなものです。自分の中に軸も経験もない状態で現場に出れば、私はきっと色々な思想に振り回され、結果として「一番楽にこなせる道」を目指してしまう。それは私が思い描く理想の教師像ではありません。この二年間、研究校として教育を問い続けているインターン先の先生方の多様な考えに出会い、共に葛藤していく。そして、子どもの成長と長期的に関わることや、大学院の先輩や仲間たちと教育について議論することを通して、自分自身の中に軸を見つけていきたい。そのために、あえて「遠回り」という贅沢な道を選びました。

そして、院進の理由はもう一つあります。それは、「研究」です。学部時代、私は大学の教授との出会いに恵まれ、中学校の関数教育をテーマに卒業研究に

力を注ぎできました。その成果を「日本数学教育学会」で発表し、賞をいただくこともできました。この二年間ではその内容をさらに深め、インターン先の授業実践とも絡めていきたいと考えています。しかしこれは、関数教育の専門家になりたいわけではないのです。私が研究をする目的は、一つの問いに対して「粘り強く勉強し、探究する術」を身に付け、高めたいからです。そのプロセス自体が、将来教育現場に出てから自ら学び、考え続ける教師としての、強固な土台になると信じています。そのため、この2年間では、大学院の授業とは別に、自身で研究を進めていきたいと意気込んでいます。

これから2年間、皆さんと共に高め合い、充実した生活にしたいと考えています。どうぞよろしくお願い致します！

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

戸谷 歩夢 (とや あゆむ)

はじめまして。今年度より授業研究・教職入門コースに入学いたしました戸谷歩夢と申します。昨年度までは、福井大学教育学部初等教育コースに所属しておりました。取得免許は、小学校一種、中学校一種(数学)、高等学校一種(数学)、特別支援学校二種です。中高の部活動では低音で合奏を支えるチューバを担当しておりました(私の身長故なのか、何かスポーツをしていたのかよく聞かれますが、残念ながらスポーツとは縁遠い生活を送ってまいりました)。

私は、子どもたちの「なぜ？」に寄り添い、共に学びを作り出したいと考えております。子どもたちは何が分かっている、何が分かっているのかを把握することで、子どもたちに対してどのようなアプローチをすることができるのかどうかを探っていく所存です。私が教師を志した原点には、一人の友人の存在がありました。彼は、中学数学で挫折してしまい、それ以来数学から距離を置いてしまいました。そもそも、算数教育の段階で既に課題を抱えていたのか

もしれません。私も少し相談に乗ったことがありましたが、彼がどこでつまづいているのかを探ることの難しさを実感しました。どこでつまづいているのか本人が自覚できないほど、根本的な部分に課題が潜んでいることを痛感したためです。こういった子どもたちの分からなさを理解し、算数・数学を学ぶことで、根拠を持って論理的に考えることの面白さを伝えたいと感じ、教育学部に進学することを決めました。

大学では、算数・数学教育を専攻し、研鑽を積んできました。卒業研究では特に、変化と関係領域における割合について研究してきました。公立中学校での副実習でも、割合に関する内容を取り扱ったことがあります。そこでは中学1年生を担当し、日常の割合に関する事象を文字式で表す活動を主とする授業実践に取り組んだことがありました。授業の中で、生徒が「どれが基準量で、どれが比較量か」を読み取れずに立式を誤ってしまう実態を目の当たりにしまし

た。公式を知っている場合でも、意味と結びついていないために活用することができていませんでした。実習先の指導教諭の先生との振り返りを通して、「小学校での理解の不十分さが中学校の学習困難に直結してしまっている」課題を共有しました。このような実態では、公式の暗記が先行してしまい、考えることの面白さを実感することは困難であると言わざるを得ません。

そこで、卒業研究の取り組みとして、割合の何が理解できていて、何でつまづいているのかを調査するため、調査問題を作成し、割合学習後の小学5年生に解いてもらうことで、実態を明らかにしました。その分析から、数値計算はできないが、一部の割合の大小を視覚的に判断する問題では解決することができました。数値計算での主な誤答は基準量、比較量の混同でした。つまり、割合の意味は理解できているが、文章問題や数値計算を要する問題と上手く結びつけることができていないという課題が浮き彫りになりました。では、どのようにすればこれらの課題を克服し、概念理解と活用力を結びつけることができるのでしょうか。仮に可能なのだとしたら、どういった教材や、授業が有効なのでしょう。こういった研究を、更なる細かな誤答類型の分析をしたうえで継続して進めていく所存です。教材作成については、静止図では基

準量、比較量、割合三量の関係性を捉えにくい可能性があるため、ICTを活用した動的な教材も視野に入れ、研究していきます。こういった子どもの多様性に応じた支援方法を考えていくにあたって、ガイダンスにも挙がっていた「当たり前を問い直す」ことが重要であると考えています。この子はこの課題が解決できていないから、ここでつまづいている、と安易に判断するのではなく、このような課題ではどうか、こう介入したらどうか、根拠に基づいて明らかにしていきたいと考えております。

大学院では、子どもたちのこういった分からなさを見つめていくこと、そして、子どもたちが「なぜ?」「この場合はどうなのだろう?」といったようにもって探ってみたいと思えるような授業を構想していきます。これまで学んできたことを活かして、インターンシップを通して、理論と実践を往還しながら、現場で通用する指導法を模索していく所存です。まだまだ未熟な部分も多く、教師としての専門性・実践力を中心に配属先や大学院の先生方、他の院生、子どもたちから多くのことを学び取り、指導力の向上につなげたいと考えております。私が決めた道ですので、後悔のないように取り組んでいきます。2年間どうぞよろしくお願いいたします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市順化小学校

鍋木 義騎 (なべき よしのり)

はじめまして。今年度より福井大学連合教職大学院授業研究・教職開発専門性コースに入学いたしました鍋木義騎と申します。昨年度までは、広島大学教育学部初等教育教員養成コースに所属しておりました。広島には、ボリューム満点のお好み焼きや、新鮮な牡蠣などおいしい食べ物が沢山あるので、ぜひ行って堪能してください。話がそれましたが取得免許は、小学校一種、中学校一種(数学)、高等学校一種(数学)です。私は、スポーツが大好きで、小学生の頃は野球、中学高校生の頃はバスケットボ

ールをしていました。大学に入学して以降も、4年間2つのバスケットボールサークルに所属し、週3日でバスケットボールをしていました。

私は、小学生の頃から将来の夢に「学校の先生」と書くほどに小さい頃から学校の先生に憧れていました。親の背中を見てかっこいいなと感じていたのだと思います。そして小学生の頃、精神的に不安定だった時期がありました。授業へのやる気も出ない、自分が悪いと分かっているのに認められない、怒られたら何もかも嫌になって逃げだす、など散々先

生方にご迷惑をお掛けしてきました。しかしながらそんな私でも見捨てず、心を落ち着かせてくれた、学校に対して前向きな気持ちにしてくれた先生方に恵まれ、学校や授業に楽しく参画することができるようになりました。そんな先生方の姿から、教員へのあこがれはより大きく、より一層教員になりたいと思うようになりました。

広島大学に入学してからは、学校見学や実践的な例から様々な指導法を学び、教育実習において実践と反省を繰り返しながら自分を磨きました。失敗することも多々ありましたが、子ども達のためにと同期と切磋琢磨しながら学んできました。また、学生サポーターという活動において、特別支援学級の子ども達を関わらせていただくこともでき、障がいを抱える子たちはどのようなことに困難を覚えており、先生方はどのように対応しているのか現場の活動から学ぶことができました。しかしながら、まだ私には足りない、学ぶべき項目が残っていました。それは、1年間と6年間を見越した学級経営です。教育実習においては、ある程度先生方がクラスの雰囲気形成している状態であり、子ども達も何をしてはいけないのか把握しているところからのスタートでした。担任の先生の学級経営における工夫見て局所的な視点で学ぶことができて、1年間を見

通した学級経営という視点で学ぶことがあまりできませんでした。また、学年ごとの心身の成長段階の違いからも学級経営の変化が見られましたが、基本的には配属されたクラスのみで深く学びとすることはできませんでした。そこで4月から学校の、クラスとしてのスタートラインからインターン生として関わり、学ぶことができる教職大学院に進学したいと考え、入学しました。

私は今後のインターンシップやカンファレンスを通して、私の中に学級経営の中核を形成していくことを目標に、努力し学んでいきたいと思います。インターン先での子ども達一人一人をよく見て、対話してクラスの総体をつかみ、有効な手立てを先生方と考察・実践しながら、子ども達が楽しくクラスに参画できるような、安心して学べる居場所となるような学級経営のための学びに向かっていきたいです。また、院生の皆さんや現職の先生方、大学院の先生方との意見交流を大切に、小さな学びでも貪欲に吸収して、自身の成長へとつなげていきたいと思っています。

大学院生活を通して、自身の目標に向かい、少しでも私が憧れた教員になれるよう、私らしい教育のスタイルを見つけられるよう日々学んでいきたいです。2年間どうぞよろしくお願いいたします

授業研究・教職専門性開発コース1年/富山市立大沢野小学校

根建 美紗 (ねだち みさ)

はじめまして。今年度、福井大学連合教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学しました、根建美紗と申します。拠点を富山国際大学に置いています。昨年度までは、山梨大学教育学部に在籍しており、小学校一種免許状、中学校一種免許状(家庭)、中学校二種免許状(国語)、高等学校一種免許状(家庭)を取得しました。

出身は富山県です。とにかく地元が大好きで、大学で県外に出ていたのですが、月に1、2回のペー

スで富山県に帰省していました。私が感じる富山県のよさは、自然が豊かで過ごしやすい環境が整っているのびのびと過ごすことができることです。「富山県」と聞くと、観光するところが少ない、田舎などのようなイメージをもたれることが多いですが、実際に住んでみるとそのイメージが払拭されると思います。特に、富山市はコンパクトシティを目指して開発が進められているため、交通網が整っています。また、東京や大阪のような都会らしさ

は少ないですが、富山ならではの観光地がたくさんあります。例えば、黒部ダムや黒部峡谷、五箇山の合掌造り、雨晴海岸などがあります。その他、チンドンコンクールやおわら風の盆など年に1度全国から人が訪れる伝統的な祭りも行われています。是非、富山県に遊びに来てみてください。

次に、私が教職大学院に進学しようと思ったきっかけについて話したいと思います。きっかけは、大きく分けて2つあります。

1つ目は、個別最適な学びを実現し、子どもたちに確かな学力を身に付けさせたり、学ぶことの楽しさを感じたりしてもらうための指導の工夫やICTの効果的な活用などについて学びたいと思ったからです。大学時代に公立中学校や附属小学校などで学生ボランティアとして、子どもたちの学習のサポート等をしていました。その際に、1学級の中に支援が必要な児童生徒が複数人おり、1人の教員で全てに最善な支援を施すのは限界があると感じました。限られた教員数で対応していくためにはあるものを最大限有効活用していくことや教員同士で連携を取り合っていく必要があると考えているので、長期インターシップでは、学校現場でどのような実践が行われているのかということやICTを用いた

実践を行うなかで活用することによってどのような効果が得られるのかななどを学びたいと思っています。

2つ目は、卒論の研究について分野を広げて研究を続けたいと思ったからです。卒論研究では、防災教育と教科教育に焦点を当て、防災教育を取り入れた小学校家庭科の授業検討を行いました。食生活分野に絞って検討を行ったため、家族・家庭生活や住生活分野など他の分野でも検討を行い、可能であれば実践も行ってみたいと考えています。また、県内で特色のある防災教育を行っている学校を訪問して、防災教育の実践についても学んでみたいと考えています。

長期インターシップでは、教員になるための資質・能力を高めるだけではなく、自分自身の教員としての教育観を形づくっていくために、子ども観や指導観、学習観など広い視野をもって、教育について多角的・多面的に考えていきたいと思っています。

この2年間、ご迷惑をおかけすることもあると思いますが、自分自身を成長させるための場であるということを感じ、様々なことに果敢に挑戦し、日々精進してまいりますのでよろしくお願いいたします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井県立羽水高等学校

三田村 寛大 (みたむら かんた)

こんにちは。令和8年度より福井大学の教職大学院にて学ばせていただくことになりました、三田村寛大と申します。将来は福井県の高等学校で地理歴史・公民科の教師になりたいと考えています。私の地元は福井市であり、文化施設が数多くあります。

そのため、福井の城下町としての歴史、福井の中心市街地の活性化等に身近に触れる環境に育ってきました。

もともと私は、歴史や哲学をはじめとした人文科学が好きで、そういった専門の学部のある大学を希望していました。しかし、私自身が福井で暮らしている中で、福井の古い歴史や伝統が、どのように日常に生きる私達と関連づいているのか。福井という存在が、日本全国、日本全体とどのように結びついているのか。そういったことを生徒に伝え、共に考え、また生徒との交流を通じ、新たな視点を得ていきたい。そのような考えるようになったことで、福井大学の教育学部を専攻し、4年間社会科教育について深く確

実に学ぶことができ、中学校教諭社会科一種免許状、高等学校地理歴史科一種免許状、高等学校公民科一種免許状を取得することができました。

私が教師を目指すきっかけは2つあります。どちらも、自分自身の高校生の時の先生方についてとはなるのですが、1人目の先生は数学科の先生、2人目は日本史の先生でした。

1人目は高等学校の数学科の先生です。私は文系であり、数学科が苦手でしたが、その先生は数学が苦手な私に対しても、些細な疑問や初歩的な質問にも真摯に、丁寧に、じっくりと時間をかけ、わかりやすく教えてくださいました。放課後の時間になっても、黒板に向かい、私に向かって真摯に、熱心に教えて下さる姿には、高校生の時の私も非常に感銘を受けました。当時の私はただ単に、疑問に感じたことを解決しようとしていただけでしたが、そうした私の態度を上手にくみ取って下さり、先生も熱心に私と向き合ってくださいっていたのだと考えております。

2人目の先生については、私は小学生の時から歴史が大好きであり、その先生の授業は、歴史好きの私をくすぐるような、面白い授業であったと今でも実感しています。歴史が好きだった私は、その先生に対して歴史の質問をすると、わかりやすく、より疑問を提起させるようなトークを展開して下さり、非常に有意義な時間でした。その先生は日本史の先生であり、私は世界史の専攻で、直接受験指導に当たっていたわけではありませんでした。豊富な知識で生徒の知的好奇心を刺激したり、会話を刺激したりする。好きこそ物の上手なれという言葉がありますが、まさにそうした態度を私に根付かせて下さる、素晴らしい先生であったと実感しております。

このように、高校時代に出会った恩師2人の先生から得た学びと理想像を基に、大学時代では様々なことに取り組んできました。具体的に申し上げるなら、大学学部のカリキュラムで設定されている学校外の体験学習についてです。中でも、大学2年次におけるライフパートナー活動や、大学3年次から大学4年次にかけて行った、私立高校での学習支援活動等、様々な教育現場を体感し、自分はこれを大事にしていかなければならない、自分にはこれが足りないな、と実感したこと数多くありました。

特に、印象に残っているものは、生徒の学びを促進したり、興味を引いたりするものは何であるかを常に見極めることです。現在、教師として私達に求められているのは、生徒に対し、無理矢理知識を教え込んだり、まるで銀行預金のように知識を詰め込んだりすることではありません。生徒が、目の前の学びに対して、自分自身から、積極的に、主体的に学びに向かっているような必要な教材設定や発問の作り方、授業展開の工夫などが重要です。

現在、私達の生きる社会は歴史的に見て、大きな混乱かつ変革の時期を見せています。戦争やエネルギー自給率の問題、選挙における勢力図の変遷、グローバル化と私達等、様々な事柄があります。こうしたことについて、社会科は、私達に確かな知識で以て何をすべきかを教えてくれます。

社会科を通じ、変革の激しい時代において、課題に向き合い、より良く解決することが出来るような生徒を育てていきたい。そういった願いを込め、大学院での学びに精進してまいりたいと思います。



令和7年度 長期実践研究報告 一覧

令和7年度の修了生が作成した、長期実践研究報告の一覧です。

号	氏名	タイトル サブタイトル
授業研究・教職専門性開発コース		
675	三澤 雅充	「子どもが主役になる授業」を求めて 半生と反省の歩み
676	川嶋 海音	気づく 見えていたもの・見えていなかったものを捉え直す
677	桑原 里沙	私たち “仲良し”を捉え直すことで見えてくるもの
678	滝波 もも加	見えない思いを結ぶ、その先に 思いを書き残す記録と子供の見取りに立ち止まり、丁寧に辿り続ける省察
679	中谷 夏菜	音楽と共に これまでの歩みとカリキュラム開発
680	永合 祐貴	シアワセを目指して
681	村橋 達也	フィユタージュ 誰かがつなげるものではなく、全てはつながっている。
682	青山 莉子	「みんなで」「全員が」を大切にした2年間 私が目指してきた授業・集団とは？
683	岩佐 帆花	向き合い方を問い直す 「人」と「人」と向き合い、ともに学ぶために
684	勝山 紘史	数学の授業における見取りと創造の実践 授業の見取りの記録と「勝山Tの挑戦状」を振り返って
685	加藤 健太郎	「意義」を問い続ける
686	島田 涼真	見とりから知る探究 福井大学附属義務教育学校の社会創生プロジェクトを見て
687	高木 雄也	子供の学びを信じる授業とは 授業実践の省察を通して
688	都筑 智也	私がつかんだ授業づくりに必要な視点とその変容 子どもが集中して学習に取り組むための工夫
689	春田 真柳	でもしか教師、それでも教師
690	府川 優美	子どもに寄り添う立場を探して
691	藤岡 真子	生き方をつくる 教師として、私は
692	平馬 瑞希	たゆたう 自分の軸を感じ取る2年間
693	干場 千尋	「楽しい」を問い続ける 授業における「楽しさ」をめぐる
694	水野 敬太	共に学びをつくるために 迷い続けた2年間
695	山本 実侑	外国にルーツを持つ子どもたちの支援から、「言葉」を見つめる より過ごしやすい場にするために

ミドルリーダー養成コース		
696	ALI SAEEDA MAIDA	The Wonders of English Reading and Writing Growing as an Educator Through Reading and Writing Lessons
697	小畑 有海	地域のwell-beingを目指して 水産教育を通して紡ぐ対話
698	北川 夏帆	教師像を拓く 「与える人」から「共に開拓する人」へ
699	古賀 めぐみ	「自己省察」から始まった「探究」の取組 Promoting Peace Through Dialogue.
700	下地 研範	対話と探究がつなぐ学びの場 教師の自己変容と生徒の学びの再構築
701	DYKENS CALEB TOMLINSON	How Education Shapes our Lives My experience teaching English in rural Japan
702	竹内 恭平	My Learning すべてはつながっている 数学的な見方・考え方を働かせて「観」を問い直す
703	谷山 麻紀	自分が変われば保育は変わる ゴールのない問いに向き合い続ける
704	中野 晃宏	「語り合える」を考える 子どもたちも大人たちも語り合える学校を目指して
705	BUCHANAN CATHERINE LEIGH	Road Trip Reflections An exploration in Dialogue, Collaboration and Student Autonomy
706	PEREIRA DOS SANTOS TIAGO	Reflective Multifaceted Support Supporting students with foreign roots in Japanese schools through creative initiatives
707	横井 杏香	きっかけが生む探究心 子ども・教師・地域を繋ぐ学びの変容
708	池森 潤	その子らしく学ぶ姿を受け入れ、よさを支えていく教師を目指して
709	斉藤 雅士	子どもと共に活動を創る
710	安田 小百合	自ら選択し、多様な学びを楽しむ 子ども一人ひとりの個性に寄り添うしなやかな教員を目指して
学校改革マネジメントコース		
711	荻原 慶子	保育を「開く」「語りあう」 保育は変容できるのか
712	田畑 彰子	学びあう集団を目指して 一人の教師の自己変容と学校改革の実践の記録・学びあいの旅路
713	山田 晶子	共に学び 共に創る 「年齢・クラス・地域」の壁を越えて
714	伊澤 英美	対話からつながりを紡ぐ 学習する組織を発展させるコーディネーターとしての役割を探る
715	泉 浩	個性が咲き誇る学校へ 「安心」と「つながり」で紡ぐ「本気」の学校改革
716	伊藤 雄樹	「教員誰もが」「生徒誰にでも」一定水準以上の教育サービスを提供し続ける ことができる持続可能な組織づくり 月残業45時間以内で取り組める効果的な教育サービスの安定供給と仕事の効率化
717	宮野 雅樹	学校改革を支えるコミュニティの可能性 人との出会いやチャンスを生かし、自ら学び続ける教員が学校を変える
718	岡本 敏明	「つながりが生む変容」 学び続ける組織と教師の変容

719	加藤 敦子	笑顔で子供たちと向き合うことができる 教員集団を目指して 3つのコミュニティの機能化に着目して
720	河田 慎太郎	伸びて行く子どもたち 子どもを中心に据えた授業改革と学校改革
721	木下 恵美	学び続けるコミュニティづくり こども課勤務3年目までの実践を振り返って
722	黒田 勇輝	校長としてのアイデンティティ 「主体的な学びの実現」を目指す学校組織マネジメントの省察
723	小林 千恵美	つながる 一人一人が輝く学校づくりのために
724	澁谷 喜代子	自己をひらき、ともに学ぶ 未完成の自分と共に育つ学びの形
725	平良 優	教師は迷う 問いが導いた探究と省察の二重螺旋
726	田村 砂弥香	教え育むということ 保健室・教育行政・校長室の多様なアングルからとらえた学校教育の風景
727	中屋 安智	生徒が輝く学校づくりを目指して 不登校ゼロを探る中で変わってきた価値観
728	野倉 理志	「エージェンシー」の視点から考える自身の歩みの省察
729	細川 和孝	志を育む実践コミュニティで未来を創る 学科再編・新カリキュラム実践による学校づくり
730	本田 順郁	生徒支援の視点をもとにした校内研究 人権教育の日常化を目指して
731	前川 博靖	12年間の学びを見通して 小中高連携・一貫を目指して
732	松永 敬子	紆余曲折の足跡から見えるもの さまざまな角度から学校教育を捉える
733	松並 千尋	「気づき、つながり、ともに育つ」の具現化を目指して 同僚性の構築に向けた自身の歩み
734	山口 武敏	目標に向かって協働する組織になるために “今のわたし”にできること
735	山田 亜都子	「協働」を求め、探究し続ける 楽しい学校を取り戻すために
736	赤尾 昌倫	教職における「観の転換（パラダイムシフト）」の探究 福井大学教育学部附属義務教育学校における教育実践を通して
737	岩佐 直美	子どもも教職員も一人一人が輝き、みんながワクワクできる学校づくりへの挑戦 「働きやすい学校」から真の「働きがいを感じられる学校」へ
738	嶋田 美幸	教師の成長を支えるもの 現場での気づきと研修運営から見えたこと
739	清水 裕子	実践を支える観の変容 「発達支持的生徒指導」を軸に
740	下島 瑞恵	より質の高いつながりの探究
741	高井 茂嘉	「協創」を物語る 協働探究を支えるコミュニティの構築に向けて
742	濱本 さとみ	ワクワクする学校づくり
743	東山 裕紀	探究活動で生徒を成長させる学校運営 探究を軸に、実践コミュニティとして学校が学び続ける姿
744	堀 歩美	子供たちの幸せと教師の幸せ 葛藤と対話の先に広がった学びの景色
745	村上 一美	開く組織の協働探究 問いをひらき、ズレを抱えながら応答し続ける
746	山本 卓也	実社会を生きる力を育むための教師集団の形成を目指して 「探究学習」の改革を核とした挑戦



その他

Schedule (4月～8月)

- 4/18,19 Sat. Sun.** 4月月間合同カンファレンス **A** 日程
- 4/25,26 Sat. Sun.** 4月月間合同カンファレンス **B** 日程
- 5/12 Tue.** 運営協議会(オンライン)
- 5/16 Sat.** 5月月間合同カンファレンス **A** 日程
- 5/23 Sat.** 5月月間合同カンファレンス(東京会場のみ)
- 5/30 Sat.** 5月月間合同カンファレンス **B** 日程
- 7/4,5 Sat. Sun.** 実践研究福井ラウンドテーブル **2025 Summer Sessions**
- 7/11 Sat.** 7月月間合同カンファレンス **A** 日程
- 7/18 Sat.** 7月月間合同カンファレンス **B** 日程
- 7～8月** 夏期集中講座 **Cycle1(a:7/25,26,27), (b:7/28,29,30)**
Cycle2(a:8/1,2,3), (b:8/4,5,6)
Cycle3(a:8/8,9,10), (b:8/17,18,19)

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
 修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
 関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。



【編集後記】

本号では、授業研究・教職専門性開発コースの院生、新任スタッフからの熱い抱負が寄せられました。また、昨年度した皆様の確かな学びの足跡としての長期実践研究報告書の一覧を掲載いたしました。今回も力作ぞろいです。連合教職大学院では今年度も、皆様と連携・協働しながら重層的なコミュニティを形成していきたいと考えています。その一環として、よりよい Newsletter を作っていきたくと思います。どうぞよろしくお願ひします。
 (2026年度 Newsletter 担当一同)

教職大学院 Newsletter **No.206**

2026.5.1 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院
 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学
 連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会
 〒910-8507 福井市文京 3-9-1
 dpdtfukuiflagship@yahoo.co.jp